永遠の情景

中嶋 正敏

この稿を書いている今は秋本番である。職場のそばにはどんなにのなる木々があって、毎年おびただしい数の実が秩序なく路面に散乱しては、嬉々としてそれらの後を追い子どもたちの光景を目にする。どんぐりにはいろいろな形があり、眺めているだけでなんなく楽しいものだ。マメバシイの実などはフライパンで炒めればビーナッツみたいに香ばしく、つまみとしてももちろんのものである。そんな意味で大人でもちょっとワクワクさせるその光景が、毎年毎年飽きもせず今の時期にきちんと再現されることに気づくにつけて、これはみしかしたら今後もずっと繰り返し続いて
 mattresses, hiranyohyo and tiny hut of the long leaves plant, the
child who has a thing to be said differently.

「あたりまえ？」
「なるほど、そう考えた時、大抵大きい方になる Nay.

木々は大きく枝を張り、堂々としてとても誇ら

子供は大きな枝を Shame. 何年なんだろうか、などと思い

を巡らせてみたりもする。だがそういえば、そんな

大きな話でとっつきにくいかもしないが、植物が

成長する過程においては普段必要以上に大きく

なら、という時にはその「つかえ棒」が減り、

逆にそれはあるというのは決して大きくなれない。だ

から例えばこの「つかえ棒」がすべて壊れてし

てよく見えているものであるらしい。
植物のも根元は同じだ、なにを考えるのはかいさかな乱暴かもされないが、もしかて子どもものの
頃は教えて木を見ないでも済むように「つかえ棒」がからだのどこかに配されているのかしら。
だから、「子どもにだっては極めて自然に「森」がよく見えているですねよ、それが「林」から構成されて
されていることを知り、そしてその中にある
「木」の感触に感じくなじみつけて次第に「森」が見
えにくくなっているのかかも
ありんて全くって
大人の視点で理屈をつけてみた。
細かい部分を知
れはさらにその先を知りたくなる。とどんな狭い
ところへ入りこみ、先にはわかれ道がいっぱい現
われる。そうやって気がつくといつしか迷路に陥
り、迷ったりしているうちに例の「つかえ棒」は無慜に壊れ
成長と共にすっかり「森」を見よ
うとしない眼になるのかかもしれない。
「つかえ棒」は一度壊されたらもう後戻りできな
い。子どもの感覚は容赦なく剥げ落ちていく。お
びただしく路面にころがるマチバシを懸命に追
い、一杯になったポケットを見せながら得意満面
の笑顔でおもしろく話す子どもたちの眼。い
つ果てるとも知れないその光景の中に、言い表せ
ないほどのまぶしさを感じる瞬間でもある。
（東京大学）